

## 第26回国際協力セミナー議事録

「今後の日本社会を担う学生に、伝えたいこと」

### セミナー概要

日時：2010年12月21日(火) 12:00～13:30 (懇親会 13:35～14:20)

場所：東京大学 柏キャンパス 環境棟 7F 講義室

参加者：60名

### 講師

藤井裕久 民主党衆議院議員



### 講師略歴

<学歴>

1951年：東京教育大学附属高等学校(現・筑波大学附属高等学校) 卒業

1955年：東京大学法学部 卒業

<政歴>

1993年：大蔵大臣(細川内閣) 就任

1998年：自由党結成、政策調査会長 就任

2003年：民主党合流

2004年：党幹事長、党代表代行 就任

2007年：党最高顧問 就任

2009年：財務大臣(鳩山内閣) 就任

2010年：財務大臣 辞任

## アウトライン

本セミナーは、大枠として二部構成で進んだ。

第一部では、「人生の転換点での決断」と題し、藤井氏の人生において下した決断の場面について話して頂いた。

藤井氏は、大学時代に法学部を選んだこと、職として公務員を選んだこと、自民党を離脱したことの三点を挙げられ、それぞれの場面について、詳細に語られた。

しかし、本人の中では、「決断をした」という実感よりも、「方向性」だけは間違えないようにし、後は運命に身を任せてきた感が強く、「こうしたい」という気持ちさえ持っていれば結果は後からついてくる、とも仰っていた。

第二部では、「学生たちに持っていて欲しい気概について」と題し、学生へ送るメッセージを頂いた。

そこでは、目の前の結果に一喜一憂することなく、歴史的な趨勢をみて物事を判断すること、国際交流に関して偏狭な考え方をしないこと、の二点を挙げられた。

藤井氏のメッセージに耳を傾け、彼の熱い生き方を目の当たりにした生徒達は、感想文からも「感動した」という声が多々上がり、講演会終了後は、この機会を自分の糧として社会に巣立っていこう、といった晴れ晴れしい顔で帰宅の途に就いていく光景が広がっていた。

## < 議事 >

### 第1部 「人生の転換点での決断」

#### 自分の持つ「方向性」の原点

正直な所、決断するよりひとつの運命をたどってきた、という感が強い。その方向性の舵取りをしたのが「平和」であった。この意味で、戦争の経験が方向性の原点となっている。戦時中、学童疎開を終えた矢先、爆撃にあった。その中で、もし、防空壕の中で生き長らえることができるのであれば、「絶対にこんな社会を作ってはいけない」と考えた。戦争は両方の国民が被害者である。平和なくして充実した社会保障はない。そして、平和なくして経済の成長なしということに心を留めておいてほしい。

#### 「法学部入学」という決断

弁護士になるために、東京大学法学部を選択した。当時、自分にとっても、自分の周りにとっても、弁護士は「弱いものを助ける、ヒーロー」だった。そんなヒーローになりたいが為に、法学部に進んだ。ただ、医者であった父に対し、継がなくとも良いのか、といった迷いは入学後も持っており、転部まで考えたこともあったが、「社会を治す医者になりなさい」と父から言われ、違う道に進むこととなった。

### 「入庁」という決断

国家公務員を目指した理由は、「公務に就きたい」と思いが本能的にあったからだと思う。その中でも大蔵省を選んだ理由は、当時、神武景気の真っ只中であつたにもかかわらず、働く人々は好景気を実感することがなかった。そこで、「国民を富ます経済政策が必要だ」と考え、大蔵省入省を決意した。

### 「自民党離脱」という決断

本来政治家になるつもりはなかったが、母親が背中を押してくれたため、政治の世界へ。その中で、自民党離党は独自の判断だった。当時、リクルート事件、佐川事件など一大政党であるがゆえに起こった贈収賄事件を背景に、政治改革本部ができた。この組織の本部長代理であつた後藤田正晴氏の2大政党制を設立し、安定した政治環境を創出する考えを支持していた。尊敬する先輩（伊藤氏：政治改革本部長、後藤田氏）の意向を知ったことをきっかけに、離党を決意した。後藤田氏からは「新党を結成し、認めてもらうまでには10年かかる」といわれたが、私はその第1歩を踏み出したと思っている。

## 第2部 「学生に持っていてほしい気概について」

### 歴史的なものの見方

今までの日本、これからの日本は歴史で繋がっている。今瞬間的に起こる事象は問題ではない。むしろ、事象を歴史的な事象と照らし合わせて捉えることが大切。すべては、歴史に通ずる。目の前の出来事に一喜一憂することは、一番大切なことを見落としがちである。この出来事は何かから派生したもので、どうなっていくのか。このことを考えることが大切である。

### 国際交流

国際関係で言えば、偏狭な考えを持たず、対等なモノの考え方を持っていて欲しい。過去の日本の行動すべてを肯定せず、他国の長所・短所を認めることの出来るような認識を持つと、国際交流の糸口が見つかる。学生の皆さんには、「健全なナショナリスト」になって欲しい。それが、世界平和、国際交流の根源であると思う。

そして、外交とは国益を追求することであり、国益とは、平和である。

## 質疑応答

Q：金融政策はデメリットが大きいと思う。財政政策も、財政が落ち込んでいる中で難しい。こうした中で日本経済を成長させるため、政府は何をすべきか？

A：野田財務大臣が補正予算案を作成した際、借金せず2兆円を確保した。補正予算では借金を増やさず、それなりの成長を見込んだ。経済成長を考える際は、「今年これだけ歳出し、来年増税してこれほどの収入が見込める」と考える観念的財政再建論者になってはいけない。経済が死んだら財政再建どころではなく、法人税も入らなくなるため、財政はただ緊縮だけを主張してはけないと考えている。

また、金融政策も相当なことをやっている。白川日銀総裁は5兆円で資産を買うと仰っているが、5兆円のうち、4兆5千億で国債・社債を買い、5千億でリスク資産を買い、その内の500億を不動産投信に使うことになっている。もちろんリスクも存在し、経済に対してプラス効果はあるが、バブルを引き起こす可能性があるため、その点に関しては注意してやっといこうと考えている。

さらに、新しい市場を作る必要があると考えている。それはやはり、TPP、FTA、EPAである。国内は少子化の問題など、市場拡大を大きく望むことは難しい。働く人をいじめずに済むのがFTAであり、外国の関税を乗り越えるために努力している企業が賃金を安くするようなことはあってはならない。ウルグアイラウンドで6兆円を農業に使うという話があったが、土地改良事業に使用してはいけないと言ってきた。そうではなく、農家の直接補償でEPAを乗り越える必要がある。しかし、結局土地改良に金が落ち、特別な人にお金が回る仕組みになった。こうしたことをやめ、農村を守ることが必要である。

その中に、観光特区というのがある。しかしこれは決して観光業界の人だけが儲かるわけではない。例えば、農産物をどんどん出せるような仕組みとミックスして取り組むことが大切だ。

農村は、自分達をつぶす政策をやるのではないかと心配している。そんなことは絶対にしない。以前、凶作により米不足に陥り急遽タイ米を入れたが、みんなジャポニカ米を食べてくれた。牛肉、オレンジの自由化の際に、農家はつぶれると知っている人がいたが、霜降りの牛肉も果物も立派にやっている。何よりも、農業は自信を持っていい。我々政府は、農村を守ることによってTPP、FTA、EPAを推進することが必要。それが経済発展の原動力となる。

Q：現在は民主主義が主流だが、民主主義の「一人一票」という制度に対し、経済では一握りの層にお金が集まっている。長い歴史の趨勢の中でこの事象をどのように捉えるか？

A：アメリカを例に取る。必要以上に借金をし、必要以上に金を使うというメタボ経済体質を有権者が選んだ。医療改革等でもそうだが、ジェラルドカーチスは、日本の医療制度は世界最高の水準である一方、アメリカの医療水準は不十分であると主張している。それは、結局選挙の結果でこうした体質を是認してしまっているためである。それがアメリカの有権者が持つ体質である。ハーバード大学教授のハンチントンは、さまざまな文明がある中で、西欧的合理主義文明は将来衰退すると言っているように、現状のみならず、他の新しい視点からの見方を加える必要があると考える。

#### **参加者の感想(一部抜粋)**

- ・IT 技術の革新やグローバル化が進行することで、今まで未来を先読みすることばかり考えていましたが、今回の講義で、歴史から学ぶことの重要性を認識しました。とくに第2次世界大戦後からの激動の時代から今後、もっと学んでいきたいと思います。
- ・米経済の **Metabolism** の話が日本財政と結びつき、よく理解できました。また、今日本で起きていることの全体観をつかむことができたように思います。
- ・日々のニュースを見ていると、近視眼的に考えてしまいましたが、今回お話を伺い、歴史的なスパンも重要だと認識しました。核問題について、ひとつの考えでなく、他の観点からの問題を捉え、自分なりの答えをお持ちになっていることが印象に残りました。
- ・理系に所属していて、あまり政治とは関係ないと考えていましたが、藤井先生の熱い話を聞いて感動しました。研究をしていると、狭い分野だけに入ってしまうですが、社会とのかかわり（どのように今の研究が役立つか）なども考えようと思いました。
- ・長年の蓄積に基づく説得力のある話だった。若い政治家にも歴史を良く学んでほしいと思う。
- ・大変迫力のある深いお話で、参加できて本当に良かったです。平和について歴史について改めて考えるすばらしい景気となりました。どうもありがとうございました。
- ・藤井議員が繰り返し「平和」と仰っていたのが印象的でした（藤井議員というと、経済・財政の人という印象が強かったのも）。「外交の基本は国益、国益とは平和」という言葉に共感しました。

- ・日本の究極の国益が平和だという言葉に感銘を受けました。平和がどういう状態を示すかという議論をしたらとても難しい問題になりますが、ひとまず、外交関係によって日本人の生活が脅かされるということがないように行動をとることが理想的な外交かと感じました。昨今のメディアの報道等を観ていると、国益というものが戦前の日本的なものに近づきつつあるのではないかと危惧していましたが、政治家の方から「平和が国益である」「良いことも悪いことも認めるようなナショナリストであるべき」という言葉を聴けたことが、非常に嬉しかったです。

第 26 回国際協力セミナー運営委員

統括コーディネーター：緒方亮介（湊研究室 M2）

議事録：菊池真理子（山路研究室 M1）

：大友陽平（山路研究室 M2）

受付：三富規容子（山路研究室 M1）

写真・感想担当：高橋雪子（山路研究室 M1）

懇親会担当：戎勇樹（堀田研究室 M1）

（注）本議事録は国際協力学専攻湊研究室修士二年緒方亮介が全責任を有しております。また、ご講演いただいた内容と相違が生じる場合があります、その場合は全て運営側の誤解が招いたものです。

質問、ご意見等ございましたら、[k96787@inter.k.u-tokyo.ac.jp](mailto:k96787@inter.k.u-tokyo.ac.jp)までご連絡ください。

以上